

プロフィール

小児科医として日本で6年間勤務した後、アメリカで公衆衛生修士を取得。修士課程中に、日本ユニセフ協会の海外インターンプログラムに参加し国連児童基金(UNICEF)エチオピア事務所で新生児保健分野でインターンを経験。また国際協力機構(JICA)エチオピア事務所の感染症サーベイランスプログラムに短期専門家として派遣。修士卒業後、Save the Children USAでのインターンを経て、アメリカ国立保健研究所に一年勤務後、平和構築事業に参加し、世界保健機構(WHO)シエラレオネ事務所に派遣される。現在、シエラレオネに戻り、Action Contre La Faim (ACF) というNGOのスタッフとしてエボラ緊急支援に携わる。

1. 平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

人々の健康と平和は裏表であり、平和無くして健康は無く、人が健康でなければ平和ではない。平和構築人材育成事業に参加している友人の影響と、国内研修後は国連ボランティアとして1年間活動できるのが魅力的だったので、応募しました。

2. 国内研修の感想は？

6週間、色々な講師の方と話をする機会があり、また、それまであまり関わる事が少なかった政治、紛争関係の課題は勉強になりました。

3. 海外実務研修での活動について教えてください。

海外実務研修は、WHOシエラレオネ事務所での勤務でした。感染症サーベイランスが主な仕事でしたが、ポリオ撲滅運動の一環としてワクチンキャンペーンに参加したり、予防接種率調査に参加したり、貴重な経験が得られました。



【ポリオ・サーベイランスの様子】
(左：北村さん、サーベイランス担当官、
右：ポリオ患者（母親に支えられている子供）)



【現地のヘルスセンターにて】
(左：サーベイランス担当官 中央：北村さん、
右：コミュニティヘルス担当官)

私の従事した感染症サーベイランスのポジションは2012年のコレラの流行を受けて作られたので、私が勤務を開始した2013年4月には流行はほぼ収まり、散发例のみみられる程度でした。流行は収束にむかっていたので、私の主な仕事は将来の流行を想定しての対策文書を作成することになりました。最初の2ヶ月間で

ほぼ大まかなところは決まっていたのですが、途中、予算の関係もあり中断し、最終的に約1年かけて文書が発行されました。お世辞にも良い文書とは言えませんが、私の最大の成果となりました。サーベイランスに関しては、定期的にかれるサーベイランス・レビュー会議の開催、アクティブ・サーベイランスのデータ収集、ポリオ、麻疹、インフルエンザ、ロタウイルス腸炎のデータ分析などでした。活動も終わりに近づいた3月、隣国ギニアでエボラ出血熱の流行が確認され、毎日のように電話会議が開催され、国のタスクフォースが立ち上がりました。私はどうも二つの大きな感染症の流行の合間にWHOに居たこととなります。

4. 海外実務研修先での感想は？一番印象に残っていることは？

一番印象に残っているのは、活動も終わりに近づいた頃、一番のカウンターパートである、保健省感染症対策局長から、ドキュメントの要約とコレラ対策文書の発行セレモニーのステートメントの下書きを依頼された事です。WHOで働く一番の魅力は直接国の保健省を支える仕事ができる事と思っていたので、嬉しく思いました。ユニセフでインターンをしたときも、エチオピアの小児科学会から、インターンの任期を延長して、プロポーザルを書いたり、ドキュメントを書いたりするのを手伝ってくれないかと言われていて、結局延長をしなかったのが、後悔していたのですが、このような形でまた国レベルの仕事に関わる事が出来て幸いです。また、海外研修後5ヶ月経ってまたシエラレオネに戻ってきた際、予想以上に元同僚が歓迎してくれたのも印象的でした。

5. 今後のキャリア・プランを教えてください。

何らかの形で途上国の保健省とともに、保健政策や、保健プログラムの運営に関わっていければ良いと思っています。できれば小児科医のバックグラウンドを活かした、小児の感染症、栄養対策が出来ればと思います。国連、二国間援助、NGOなど、どの媒体をとるにしても、支援対象国の保健衛生の改善に取り組む事が出来れば良いと思っています。

6. 平和構築人材育成事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。

この分野は何と言っても狭いので、国内研修では日本人間のネットワークを築くのに良い機会になると思います。多くの著名な講師陣と話をする機会が持てますし、同期の繋がりもできます。

また、海外実務研修は、長期間にわたって同一国で働く機会を与えてくれました。私はWHOでの任期の延長は出来ませんでした。今、未曾有のエボラ出血熱の大規模流行という公衆衛生の緊急事態に対して、シエラレオネに戻って対策にあたる、おそらく人生で二度と無い機会を得ました。医療従事者の端くれとして、また公衆衛生を専門にする者として、自分の持てる力を尽くして、任務にあたりたいと思います。

どのような専門性を持っていてどの国に派遣される事になっても、このステップが次のステップにつながる事は間違い無いと思います。現在のシエラレオネのWHOは昨年とは打って変わって、本部のスタッフは全てインターナショナルスタッフで、専門性が格段に高くなっています。この時期にWHOで活動が出来たらと思う事はありますが、過去の活動が現在の活動に生きている事は間違いなく、今はNGOのスタッフとして現場で働ける事に喜びを感じています。